千葉が舞台の映画相次ぎ公開、スクリーンから魅力発信

#千葉 #関東

2022/5/25 1:49 [有料会員限定]

古い町並みが残る佐原地区の各所で郷土の偉人、伊能忠敬を題材とした映画「大河への道」のポスターを見かける（千葉県香取市）

千葉県を舞台にした新作映画が相次いでいる。20日に香取市ゆかりの伊能忠敬を題材にした娯楽作「大河への道」が全国ロードショー。27日には船橋市立船橋高校吹奏楽部で受け継がれる応援曲を巡る実話を描いた「20歳（はたち）のソウル」が公開を控える。各地は地域発信や観光振興への波及効果を見込む。

松竹配給の「大河への道」は初の日本地図を作ったとされる伊能忠敬だが、没後に地図を完成に導いたのは実は――というストーリー。郷土の偉人である忠敬を大河ドラマにしようという市職員の奮闘を重ねつつ、笑いも交えて意外な史実を描く。中井貴一さんや北川景子さんら俳優陣が過去と現代の1人2役を演じるのも話題だ。

香取市の佐原地区はかつて水運で栄え、忠敬の旧宅を含めた古い商家などの趣ある町並みが残る。以前からロケ地として人気が高いが、今回は香取市役所が舞台にもなり、市内での撮影時にエキストラで協力した市民も多いという。商店の店頭など各所に映画のポスターが張られ、地元の思い入れは強い。

水郷佐原観光協会の増子洋一郎事務局長は「映画がブレークして、観光客の動きにつながれば」と語り、新型コロナウイルスの影響で減った客足の回復に期待する。同協会はロケ撮影を支援するフィルムコミッション事業も手掛ける。東京都心から日帰り圏ながら江戸の風情が残ることを強みに、テレビ番組などのロケ地需要が上向けばと見込む。

日活配給の「20歳のソウル」は名門として知られる「市船」の吹奏楽部が舞台。スポーツの強豪校でもあり選手たちを鼓舞するため、同部で演奏され続けているオリジナル応援曲を在学中に作曲した主人公の短くも輝いた青春を描く。

東武百貨店船橋店は映画の製作委員会の協力を得て、6月21日まで撮影風景や名シーンの写真パネル、市内各所のロケ地マップを店内のレストラン街で無料展示。船橋市民ギャラリーでも24日から撮影につかった品や吹奏楽部の歩みなどを紹介する「20歳のソウル展」が始まった。

茂原市内の12カ所などで撮影された映画「今はちょっと、ついてないだけ」（ギャガ配給）も4月に公開され、各地で上映が続く。同市はロケ誘致を観光振興につなげる「ロケツーリズム」に熱心な長野県千曲市などとともに全国4市町で共同製作事業体としても協力した。

茂原市内の官民は「千葉もばらロケーションサービス」を2018年に設立。施設との撮影交渉やエキストラの確保、ロケ弁当の手配などきめ細かく撮影隊を支援し、ロケ受け入れの実績を伸ばしている。

千葉県流山市にある「スターツおおたかの森ホール」での「ドライブ・マイ・カー」の撮影風景（20年3月、流山市フィルムコミッション提供）

3月に授賞式があった米アカデミー賞で国際長編映画賞に輝いた「ドライブ・マイ・カー」も一部シーンが流山市内のホールで撮影されたが、その陰には流山市フィルムコミッションが築いた濱口竜介監督との関係が生きたという。

千葉県は都会も自然、里山もあり、海や山にも恵まれて幅広いシーンの撮影に対応できる。加えて都心から近い地の利もあり、ロケの適地として成長余地は高そうだ。（真鍋正巳）